

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.17〉

<常盤④ 散策マップ>

宇部市はかつて石炭によって栄え、最盛期の1940年には年間約430万トンの石炭が掘り出された。宇部炭田発祥の湖畔がある常盤地区にも、常盤（鍋島）海岸沿いに炭坑が点在していた。常盤ふれあいセンター①を発着点に、旧道を通る約5キロのコースで石炭の史跡を訪ねてみた。



炭鉱の盛衰、物語る史跡群

坑道入り口やピーヤなど現存



同センター駐車場の一角に引かれた線は、江戸時代の国境を示している。江戸から明治時代初期まで、旧恩田地区側は厚狭郡の長門国、旧西岐波側は吉敷郡の周防国だった。亀浦交差点②の中央分離帯にも周防長

門国境石碑が残る。大沢西交差点から国境に沿って南に進んでいくと海岸付近の亀浦古墳③にたどり着く。現在は盛り上がった土の上に木が生えているが、古墳時代後期の円墳と推定される。一度、土砂崩れで中の様子を見た住民によると市内では珍しい竪穴式だったという。

山口宇部空港に離着陸する飛行機を間近に見ることができ、常盤海岸④に沿いを進むと、竹林の中に黒崎坑道跡⑤がある。1927年に開坑した昭和炭鉱のもので、現在は奥行き30メートルほど埋め立てられており、近寄り難い雰囲気だ。

黒崎東海岸の炭層露頭⑥を歩いていくと、沖合に海底炭鉱の排気口となるピーヤ⑦（写真）が2本見えた。14年に開坑した長生炭鉱は33年に探炭を始めたが、42年2月3日に沖合約1キロの坑道で水没事故が発生。朝鮮半島出身者を含む労働者183人が犠牲になり、82年に長生炭鉱殉難者之碑⑧が建立された。

最後に、国境間での問題を話し合う地域として、野黒目から大沢県管名付けられた「論瀨（ろんぜん）」を通って終点だ。

炭鉱の歴史に思いをはせる機会になった。江戸時代の国境をまたぐ楽しさも味わってほしい。
次回は吉部地区。28日スタート。